

[投稿論文：実践報告]

屋久島町口永良部島と SFC 生の 10 年を辿る

当事者として関わる大学生の実像

The 10 Years of Kuchinoerabu Island and the Students of SFC

Real Stories of the Students

富永 真之介

総務省職員／慶應義塾大学 SFC 研究所所員

Shinnosuke Tominaga

Staff, the Ministry of Internal Affairs and Communications / Researcher, Keio Research
Institute at SFC

Correspondence to: s.tominaga@soumu.go.jp

Abstract: 慶應義塾大学長谷部葉子研究会に属する屋久島町口永良部島プロジェクトは 2011 年から 10 年にわたり、鹿児島県屋久島町口永良部島と継続的に協働し、地域と大学の資源を活かし合う関係性を構築してきた。本実践報告では、その活動の経緯を紹介すると同時に、中長期的なフィールドワークを実施してきた大学生の当事者性に焦点を当てながら、現地の島民と当事者性を交差させることが、継続的な活動に結びついていることを提示する。

The Kuchinoerabu Project, of the Yoko Hasebe Laboratory, at Keio University has been collaborating with Kuchinoerabu island of Yakushima township in Kagoshima prefecture for 10 years, since 2011. This thesis introduces the background and history of the project and shows the importance of sharing the stories of people concerned and understanding the process to build a sustainable partnership and relationships between the islanders and university students who have been involved in medium to long-term fieldwork activities.

Keywords: 総合政策学、当事者性、フィールドワーク、地域、大学生
policy management, stories of people concerned, fieldwork, local community,
university students

1 はじめに

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下、「SFC」という）における長谷部葉子研究会（環境情報学部）の屋久島町口永良部島プロジェクト（以下、「本プロジェクト」という）に属する学生は、2011 年より小中高の各教育機関・大学間の相互交流を促進する活動を展開している。また、2013 年以降は、数ヶ月から 1 年間地域に滞在して行う学生の中長期的なフィールドワークが恒常化している。これまで、本プロジェクトをきっかけにして、島民発、または学生発の活動や新しい交流が発生すると同時に、学生にとってキャンパス内では実現しない学びの機会が生まれてきた。

本実践報告では、活動の大きな特徴として、総合政策的アプローチの過程で、学生が中心的な役割を担っている事実を示す。その上で、学生の当事者性こそが、地域において学生が主体的に活動に取り組もうとする強い動機づけとして重要であることを示し、一つの事例としての本プロジェクトを、10 年間継続させる原動力となっていることを明らかにしようと試みる。

2 屋久島町口永良部島プロジェクトの概要

鹿児島県屋久島町（推計人口 11,877 人）は、屋久島と、その西方 12km に位置する口永良部島の全域を行政区域としている。口永良部島は戦後の約 2,000 人から現在の 102 人¹⁾へと、人口減少が著しい。また、鹿児島県本土からは屋久島を経由して町営船（1 日 1 便）で 1 時間 40 分かけてたどり着く立地のため「離島の中の離島」と呼ばれる。

2010 年に国土交通省の「離島の活力再生支援事業」のプログラムの一環で学生が現地に滞在したことをきっかけに、2011 年より長谷部葉子研究会²⁾にて屋久島町口永良部島プロジェクトが開始する。以後、大学生や高校生を対象とした屋久島や口永良部島での研修合宿の実施や、屋久島・口永良部島の小中学生を SFC に招待しての合宿等の相互交流が進んでいる。

また、詳細は後述するが、2013 年からは学生の数ヶ月～1 年間の長期滞在が、学生自身の意思によって継続的に実施されている。さらに 2019 年には口永良部島出身の高校生が AO 入試により SFC に入学するなど、プロジェクトの枠組みを超えた、地域と大学の関係性が築かれている。

3 プロジェクトの活動内容の変遷

初年度(2011)の活動は、長谷部葉子研究会に加えて建築系の研究会も参加し、古民家を改修して「場づくり」を実施することを中心に据えた。学生が数名ずつのグループに分かれて、農林水産、土木等、多様な生業を持つ島の大人たちに一時的に「師事」して、島を知り、役割を模索しながら関係性を構築する期間であった。

2012年度には、本プロジェクトに関心を持った都内の私立中高一貫校(郁文館夢学園のうち、郁文館中学校と郁文館グローバル高校)より「中高校生も島に」との連絡をいただき、初年度実施した島滞在のプログラムを、都市とは異なる社会を実体験として学ぶ、1つのパッケージとして企画し、中高生15名(男6名、女9名)が参加した。滞在中は中高生らが島を知るためのホームステイや、大学生との対話やWSを実施してキャリアや学びについて深める時間が盛り込まれた。学期中も学生が毎週学校に赴いて、滞在に向けた準備授業、また滞在後の振り返り、まとめの授業を実施した。この連携は翌年以降も継続し、2014年度には郁文館グローバル高校の正規カリキュラム「協働ゼミ」の1つのコースとして組み込まれ、郁文館グローバル高校と口永良部島の二者間の活動を本プロジェクトが一部参画する形で現在に至るまで継続している。また、後述の学生Fは、高校生1年次に本活動に参加したことを機に、卒業後SFC生として本プロジェクトに参加した。

また初年度の活動の様子が、公務で島を訪れていた町役場職員の目に留まり、行政に関心を示す学生もいたことから、2012年度にはプロジェクトメンバーが町役場の各課に数名ずつ配属され、屋久島町役場でのインターンシップを計2週間実施。以後は、随時町役場とも連携しての活動となる。また、2013年度に鹿児島県庁企画部離島振興課への2週間のインターンシップも実施し、以後継続的に学生を受け入れていただいております、2018年度には口永良部島出身の高校生の受け入れも実現した。

大学生の活動は2013年度から後述の学生Aが1年間休学し、現地に滞在中にして以降、継続的に延べ11名の学生が中長期的な滞在を実施しており、現地を拠点に活動するメンバーと大学を拠点に活動するメンバーが同時並行する形となった。学生の中長期滞在を一種の「学業」として認識し、単位取得と

の両立を実現するべく各関係者に提案し、2015 年には SFC に「フィールドワーク科目」が設置されることとなった。

口永良部島においては、2014 年と 2015 年に活火山の新岳で噴火が発生したことは非常に大きな影響を与えた。特に 2015 年の噴火では史上初の噴火警戒レベル 5 が発表され、全島避難となり、島民は半年以上に及んで隣の屋久島での避難生活を強いられた。本プロジェクトとしても、これまで口永良部島で暮らすことを前提に活動してきたことから、活動内容について大きな変更を余儀なくされたものの、状況に照らして役割を模索するという本質は揺らぐものではなかった。むしろそれまでの 5 年間で築いた関係性を生かしてできることを考え、支援金の募集 HP 開設や、島の模型を囲みながら口永良部島を知り、考え、これからをつくる「口永良部島これから研究室」と称した企画展示とワークショップを避難先の屋久島で 10 日間実施した。「口永良部島これから研究室」は帰島後の 2016 年度にも口永良部島の公民館で 2 週間実施した。

2017 年度は、口永良部島の本村区長が、全国エコツーリズム大会の口永良部島分科会において「口永良部島を『教育の島』として興していく」といった旨の宣言を行い、2018 年度には、島出身の高校生等が、多くの島民を集めて島の将来を本気で議論する会を催そうと企画した「口永良部島未来会議」を、郁文館グローバル高校生と SFC 生とともに実現させた。また、「口永良部島大学」と称して、SFC から本プロジェクト、広島大学海洋研究室、東京大学田中俊徳准教授、口永良部島本村区長、未来会議を主催した高校生等々のプレゼンテーション大会も実現した。どちらも島側主導で運営されたことが、大きい価値を持っている。2018 年度は、それに加えて、「株式会社離島キッチン」の新店舗開店の企画に参画する形で、口永良部島の食材を使ったメニューを作った。一部学生が 1 ヶ月間島に滞在し、島の 1 次産業者と連携し、食材を発送することで、期間限定で日本橋の離島キッチン店舗で料理を提供する取り組みも実施し、都心において島の食文化の発信も実現した。

2019 年度は「SFC キャンパスツアー」を実施した。これは長谷部葉子研究会が、鹿児島県の口永良部島の他、秋田県の羽後町、長野県木曾町の開田高原、SFC が所在する神奈川県藤沢市の遠藤地区、首都圏の中学・高等学校

等、様々な地域の学校において活動を行う中で、そうした数々の現場の中高生が、SFCの滞在型施設 SBC で一堂に会し（一部はオンラインで繋ぎ）、衣食住を共にしながら SDGs をテーマとしたワークショップに取り組む交流学習型合宿プログラムを研究会で主催した取り組みのことを指す。鹿児島県屋久島町からは、2019 年の夏期に口永良部島の中学生 2 名と教員の先生 1 名（+高校生 2 名）が参加した。しかも、参加者の旅費については、口永良部島の基金から拠出してもらっており、基金を管理する委員会の全会一致の承認を得て実現したという事実にも重要な意味がある。

表 1 プロジェクトの活動年表

年	活動内容
2010	(活動内容) ・国土交通省「平成 22 年度離島の活力再生支援事業」参加
2011	(活動内容) ・プロジェクト発足 ・活動拠点としての古民家を拝借、リノベーション ・生活体験プログラム「匠プロジェクト」(＝離島ホームステイプログラム)の実施 ・子どもたちに対する「寺子屋」を開始 ・口永良部島の中学生 1 名の東京研修実施 (その他) ・SFC 政策研究支援機構 活動助成金採択
2012	(活動内容) ・第 1 期高校生教育研修の実施 ・屋久島町役場で短期インターンシップ実施 (6 名、2 週間) (その他) ・総務省「域学連携地域づくり実証研究事業」採択 ・SFC 政策研究支援機構 活動助成金採択
2013	(活動内容) ・口永良部島の中学生 2 名の東京研修実施 ・屋久島町役場での長期インターンシップ実施 (1 名、1 年間) ・鹿児島県庁インターンシップ実施 (1 名、2 週間)

	<p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鹿児島県「NPO 共生・協働・かごしま推進事業」採択 ・SFC 政策研究支援機構 活動助成金採択 ・本音を語ろう会参加
2014	<p>(活動内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育研修を実施していた高校にて新たな授業形態として「ゼミ活動」が加わり、その内の一つに「口永良部島ゼミ」が発足 ・屋久島町役場での長期インターンシップ実施 (1 名、1 年間) <p>(その他)</p> <p>★口永良部島 新岳噴火</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SFC 政策研究支援機構 活動助成金採択 ・鹿児島県「アイランドキャンパス事業」採択
2015	<p>(活動内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・噴火災害発生に伴い口永良部島ふるさと支援プロジェクト発足 ・「口永良部島これから研究室」を避難先の屋久島で実施 (10 日間) <p>※臨時プロジェクトとして、中間支援プラットフォームの整備 (募金の他、全国からのエールや復興アイデアの募集)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・慶應義塾大学 SFC の授業としてフィールドワーク科目が設置される ・屋久島町役場での長期インターンシップ実施 (1 名、1 年間) <p>(その他)</p> <p>★口永良部島 新岳噴火、並びに島民の全島避難 (半年間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SFC 政策研究支援機構 活動助成金採択
2016	<p>(活動内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・口永良部島における復興作業のお手伝い ・「口永良部島これから研究室」を口永良部島本村公民館で実施 (2 週間) ・鹿児島県庁短期インターンシップ実施 (1 名、2 週間)
2017	<p>(活動内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金岳小中学校の用務員としての 1 年間の長期滞在 ・屋久島町役場での長期インターンシップ実施 (1 名、半年間) ・屋久島町役場での長期インターンシップ実施 (1 名、2 週間) <p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SFC 政策研究支援機構 活動助成金採択 ・屋久島町で行われた全国エコツーリズム大会の分科会にて口永良部島本村区長より、島外の大学とも協力し「教育の島」を目指す旨が宣言される

2018	<p>(活動内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都内の飲食店「離島キッチン」での一ヶ月間の口永良部島メニューの出品、及び島内での結果報告会を実施 ・島内外の関係者が口永良部島のこれからについて話し合う「口永良部島大学」を「口永良部島未来会議」と同時実施 ・口永良部島出身の高校生の鹿児島県庁短期インターンシップ実施(1名、2週間) <p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鹿児島県「アイランドキャンパス事業」採択 ・口永良部島出身の高校生等が「口永良部島未来会議」を実施
2019	<p>(活動内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長谷部葉子研究会として、口永良部島金岳小中学校を含む複数の地域、教育機関(中学校・高等学校)の生徒を対象とした「SFCキャンパスツアー」を実施 <p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SFC政策研究支援機構 活動助成金採択

4 学生の中長期滞在

本プロジェクトに参画していた学生は、2011年の発足から数えて、卒業まで在籍しなかった者も含めて41名にのぼる。そのうち、プロジェクトチームでのフィールドワークとは別に、1ヶ月以上の中長期滞在を個人で実施したプロジェクトメンバーが9名(A～I)、またプロジェクトメンバー外で2名(J、K)いる。また、今回の事例では、比較的短い期間(2週間～1ヶ月間)ではあるが、単独でフィールドワークし、体育会剣道部として小中学校での体育授業を担当するに至る、継続的な成果をあげたプロジェクトメンバーの2名(α 、 β)も、中長期滞在者に類する事例として取り上げる。それぞれの活動の概要は表2を参照。

中長期滞在による活動を選択する学生が1/4近くと、少なくない割合で出現していることは、本プロジェクトの最大の特徴の1つと言える。一方で、本プロジェクトや長谷部葉子研究会が、中長期滞在を条件に学生を選抜していることはなく、学生は自発的に、個人の興味関心に基づいて選択している。学生の元々の経歴をみても、1名が内部進学、 α と β がAO入試である以外は一般入試でSFCに入学しており、高校生の時に本プロジェクトの活動に参

加していた F を除いて、入学前に地域づくりの取り組みなどに関わっていた者もいない。また、学生生活としてもスポーツまたは文化系のサークル・部活に所属しながら塾等でアルバイトをしていた者が主で、一般的な大学生であると言える。

では何が、学生のプロジェクトへのコミットと中長期滞在の決断を促進しているのだろうか。SFC または長谷部葉子研究会の環境を考慮した際に、まず 2 つの要因が考えられる。

1 つ目が、SFC のカリキュラムである。1 年次最初の春学期から研究会が履修可能であることが SFC のカリキュラムの特徴である。学生生活の後半からゼミの履修が始まる大学が多いなか、SFC では入学と同時に履修が可能である。本プロジェクトメンバーのうち、中長期滞在者の研究会履修開始時期は 1 年次が 6 名、2 年次が 3 名であり、1 年秋学期が 4 名と一番多い。また、研究会履修開始から中長期滞在開始に至るまでの平均在籍期間は 1.75 学期間であり、中長期滞在を開始するまでに、1～2 年間は大学を拠点に活動しながら短期的なフィールドワークを重ねる時間があることがわかる。中長期滞在を開始するまでに重ねた短期的（数日～2、3 週間程度）なフィールドワークの回数は平均で 5.3 回であり、十分な現地での関係性構築の期間を経て、中長期滞在を開始している。研究会を学生生活の前半から履修できることで、現地やプロジェクトメンバーとの関係性構築、中長期滞在、帰還後の研究活動の時間が確保されていると言える。

加えて、2014 年度から「4 学期制」が導入され、特定の期間に集中的に授業を配置することで学生生活の柔軟性が一気に増した。実際、中長期滞在者は A・K の 2 名しか休学しておらず、履修の柔軟性を基盤にしていると考えられる。

2 つ目は長谷部葉子研究会が、国内外でのフィールドワークと現地との関係性構築を前提に活動していることである。特に、2011 年よりコンゴ民主共和国に、学生複数名が 1 年間休学し、日本語教授活動を実施するなど、フィールドに長期滞在する前例が存在したことは、2013 年度に本プロジェクトの長期滞在事例が出現するにあたり影響していたと考えられる。2020 年度については、口永良部島以外に 5 つの自治体で長期滞在している学生がおり、履

修の必要条件ではないものの、中長期滞在は既に一般化したフィールドワーク形態となっている。

一方で、上記の要因を以てしても、学生が滞在を決断するハードルは高い。なぜなら、中長期滞在にかかる資金の工面は各学生個人に委ねられており、貯金を切り崩しながら滞在することを基本に、一部の学生は、現地の運送会社や家庭教師でアルバイトをして生計を立てていた。プロジェクトとしては、学内の助成金(SFC 政策研究支援機構など)を獲得しているが、こちらは長期休暇時のプロジェクト全体のフィールドワークを中心に活用された。

加えて、現地との調整も、学生個人に委ねられている。プロジェクト活動について協力関係にある島民の方は複数名いるが、中長期滞在をするにあたりどのような人間関係の基盤の上で過ごすかは、学生個人の関係性に委ねられる。滞在場所としては研究会で借りている民家があるものの、学生は自分の力で中長期滞在を可能とする環境の獲得が必要であり、これを可能とするには、大学のカリキュラムや研究会の風土とはまた異なる動機づけが必要となるだろう。これについて、「当事者」と「当事者性」をキーワードに次節以降で考察したい。

表2 中長期滞在者

氏名	性別	学年	滞在期間	活動内容
A	男	3	2013.8～2014.8 休学	・島内の物流からインフラ整備まで幅広く扱う運送会社(島内唯一の企業)にて勤務しながら、島暮らしを経験 ・2014年の新岳噴火を島内で経験
B	男	3	2014.9～2015.8	・屋久島町企画調整課にて長期インターンシップとして屋久島での滞在を開始 ・地方創生事務補佐(臨時職員)として地方創生の総合戦略策定業務に従事 ・2015年の新岳噴火、その後の島外避難に係る災害対応に従事
C	男	4	2014.10～2014.12	・大学生地域派遣制度の提案書類を作成し、鹿児島県庁離島振興課に提案

D	男	2	2015.8～2016.3	・屋久島町企画調整課インターンシップとして地方創生業務に従事
E	男	3	2016.6～2016.11	・運送会社勤務
F	男	3	2017.9～2018.2	・屋久島町企画調整課インターンシップ
G	女	3	2017.9～2018.3	・金岳小中学校に用務員として勤務
α	男	4	2017.12 (14 日間)	・金岳中学校での剣道授業
H	男	3	2018.4～2018.5	・離島キッチン の口永良部島フェア企画開催中、特産物 (伊勢海老等) の発送作業を担当
I	女	3	2018.10～2019.3	・民宿のお手伝いを中心に、島暮らしを経験
β	男	2	2018.12 (1 ヶ月間)	・金岳小中学校での剣道授業
J	女	4	2019.11～2020.1	・非プロジェクトメンバー ・民宿のお手伝いを中心に、島暮らしを経験
K	男	4	2020.5～2021.2 休学	・非プロジェクトメンバー ・金岳小中学校に用務員として勤務

5 当事者としての学問

「当事者」の定義は、広辞苑によると「その事または事件に直接関係をもつ人」である。この一般的な定義に対して、中西・上野は、「当事者とは、『問題をかかえた人々』と同義ではない。問題を生み出す社会に適応してしまっただけでは、ニーズは発生しない。ニーズ (必要) とは、欠乏や不足という意味から来ている。私の現在の状態を、こうあってほしい状態に対する不足ととらえて、そうではない新しい現実をつくりだそうとする構想力を持ったときに、はじめて自分のニーズとは何かがわかり、人は当事者になる」(中西・上野, 2003, p. 2) と発展的な概念を示している。「当事者」とは単に関係がある以上に、状況の変化に向けて役割を担いうる主体としての行動的な意味合いが含まれると考えられる。

本プロジェクトの学生が所属する SFC には、総合政策学部があり、総合政策学は「当事者としての学問」(大江・梅垣・岡部, 2006, p. 108) を重視する。「それはまず何より、自らが現場に入って現実の問題に取り組み、政策を提案するだけでなく、実行にまで関わって、社会の新しい姿を自ら描き出す。(中略) 外部観察者として状況を理解すればよかったこれまでの学問に対して、総合政策学では当事者として社会にいかなる働きかけを行うか、意思決定の判断

を行っていかなければならない」(同上, p. 108)

そして現場で必要な作業として、「ネットワーク的な現象は『現場』で起こり、中央を介することなく、直接的に他の現場に伝播していく。であるならば、それを理解する政策学も中央省庁の統計データなどに加えて、(イ)人々の生活や生産の現場におり、(ロ)発生している萌芽的な事象から概念化を行い、(ハ)その概念をめぐって入手可能なあらゆる手がかりを動員する、といった作業を行っていかなければならない」とも述べている(同上, p. 111)。

こういった総合政策学を構成する当事者の概念を、本プロジェクトが取り組む地域やフィールドワークの文脈と結びつけている事例は、慶應義塾大学総合政策学部創設30周年の歴史よりも古く、垣間見ることができる。民俗学者である宮本常一³⁾は、国内の中山間・離島を問わず農村地帯を約16万キロ徒歩で移動し、記録を残しながら、離島振興法などの制度設計にも関わった。

宮本にとって民俗学は「体験の学問であり、実践の学問である」(宮本, 1978, p. 7)。そのことは現場に赴き、現場の目の前の問題に役に立つ学問を実現しようと試み、それを繰り返し著書に記している宮本の姿勢から、十分にうかがえる。また、その手法について、下記の通り、一切の制約を外している。

「民俗学にはおのずからなる限界があるが、野を歩き、現実にもものを見ようとする者にとっては、一つの学問の法則にくらなければならぬ、ということはない。要は追究しようとするものの実態をつかめばよいのであって、一人一人の生き方がみんな違ってするように、一人一人で自らに適した方法で対象と四つに組むべきである」(宮本, 1968, p. 5)

結果として、宮本は、調査し記録する者としての自身の役割を発展させ、農村への技術指導や、国会議員や官僚、地方役場を巻き込みながらの制度設計、運用に入口から出口までアプローチした。

そして宮本は当事者として地域に関わることに徹底した姿勢を貫く。師として仰いだ柳田國男の言葉について下記の通り解釈している。

「そういう民衆の生活は虚心に民衆の中へ入って見なければわからないものである。柳田先生が「郷土で或るものを」と言ったのは、正しくは「郷土人の感覚で或るものを」ということであろう。そしてそのことによってのみ、民衆の生活を明らかにすることができるのではないかと思う」(宮本, 1968, p.

16)

その上で、「私は私の眼で世間や文化を批判するまえに、私自身が実験台になって批判の対象になるべきだと思っている」(宮本, 1978, p. 8) と述べるように、自ら実践していくことを信条とした。

このように、総合政策学における当事者の概念と、宮本民俗学の視点に共通項がみられるのは、フィールドとしての地域がもつ多様性や「暮らし」の持つ多面的な機能によるものであるとも考えられる。今後、総合政策学における当事者の概念をより深化させるためにも、地域を現場として取り組む屋久島町口永良部島プロジェクトの実例は有用であると考えられる。

6 大学生の当事者性と「交差」

では本プロジェクトにおいて、学生はどのように当事者として関わっているのだろうか。

当事者と当事者ではない者の関係性を表す一つの尺度として、当事者性(松岡, 2006)がある。当事者性とは、「『当事者』またはその問題的事象と学習者との距離感を示す相対的な尺度」あるいは、「『当事者』またはその問題との心理的・物理的な関係の深まりを示す度合い」(松岡, 2006, p. 18)である。松岡(2009)は福祉教育・ボランティア学習の今日的定義の一つを「互いの当事者性を交差させることによって当事者性を高め深め、その協働関係を文化や社会システムに反映させていくプロセス」とし、「当事者性の交差」という考え方を提示した。ここでいう互いの当事者性とは、対象とする問題的事象における当事者性だけでなく、その周辺に位置する人々の他の問題における当事者性も意味する。

本プロジェクトにおいて、学生にはどのような当事者性があるのかについて、ここでは、学生(既に卒業した者については当時)のレポート等から抜粋して、意識や態度変容の実際に紐付けながら説明したい。引用元のうち、「研究会課題レポート」は長谷部葉子研究会において毎学期学生に提出が求められているレポート(10000字程度)であり、作成した学期をそれぞれ記載した。「卒業制作」は卒業プロジェクト科目の成果物である。また、学生Bは休学せずに中長期滞在した最初の事例として特徴的である一方で、当時の様子が

うかがえる記録が無かったため、2020年1月にB自身と本プロジェクトの関わりを示すエスノグラフィの作成を依頼し、2020年9月に提出を受けた。ここからの引用は「本稿執筆のため依頼した手記」と記載している。

一般的な域学連携活動においては、過疎地域として抱える課題を問題的事象とした上での、問題との距離についての当事者性が想起されるかもしれないが、それ以上に、本プロジェクトにおける学生は学生である「自分の問題」についての当事者性を持って現場と関わり、交差させている。

6.1 活動環境構築における問題の当事者

学生が現場に赴いてやりたいことをやる上で、最も重要なのは現地に赴くための、時間と予算を確保することである。またそのための制度的課題もある。一般に大学生はキャンパスに通うことが「普通」とされている中で、特に長期滞在をしようとする学生にとっては、関係各位への説明責任がある。

Aは、前例のない口永良部島への1年間の滞在について、それをどのように実現するか暗中模索しながらも、率直な想いをまず親に相談した。

まず、最初に休学の意味を伝えなければいけないのは、親でした。当時、休学して過ごす一年間を基礎にして、大学院に進学して口永良部島のことを、さらに深めていこうと考えていました。しかし、就職が先延ばしになることや、はじめて親元を離れることを考えると、当然、親の理解と協力を求める必要があります。そこで、はじめて、父親とサシで食事をし、その思いを伝えました。

(中略)

自分が、どうしてこれまで生きてこれたのか、身近な方々への感謝を忘れてはいけない、と実感した日になりました。(卒業制作より抜粋)

Bは、1年間の長期滞在向けて、「長期滞在をするまでは波乱万丈」であり、一般的なキャンパスライフから逸脱することにより、逆に「当たり前」の存在を認識し、「学生生活で支配されている『なにか』をここぞとばかりに感じることになる」と述べた。具体的には、

長期滞在を決意するまでの過程で①単位の獲得、②自身のキャリア、③暮らしの保証、④受け入れ先の理解、⑤プロジェクト活動の発展、⑥親への説明などに頭を悩ませた。(本稿執筆のため依頼した手記より抜粋)

誰かから委託された訳でもない活動を実現する際に、活動の環境構築を自ら手探りで進めていく過程は、学生の当事者として関わる姿勢において非常に重要な要素である。

資金の課題については、各自の自費に加えて学内外の助成金等の活用を進めてきた。これもまた、自分たちで獲得に向けて苦心しながら進めている。こういった学生の主体性と当事者性が、島民との議論の場において衝突することもあった。

2013年に、島民の方を中心とした数人が発起人となり、全島民に呼びかけ「島の未来について各々の立場から本音で語り合う」為の会議が開かれた。学生はオブザーバーとして参加を認めてもらい、全島民の三分の一から二分の一に近い人数が集まった。当時プロジェクトリーダーであったCは、当時についてレポートを残している。

「本音を語る会」では私たちはオブザーバーとして参加を認められた為に基本的には発言はしないスタンスでいたのであるが、島民から発言を求められ、結局大々的に発言するに至った。その中で「慶應は結局何を目指し、何をやるのか」「島民の声が反映されていない無駄なことをやっていないか」「もっと活動に対して十分な説明をせよ」等、痛烈な批判を浴びた。私はこれに対して、おそらく思い込みにより誤解が生まれているが故にこのようなことを言われるのであると考え、一つ一つの質問に対して、解釈のずれがない様に丁寧に答えていった。そしてそれだけではなく、せっかく多くの島民の前で発言権をいただいたので、私達はこの島に来たくて来ている、自分がアルバイト等で稼いだお金を使って、自らの意思で来ている。この意思は強固なものであるということを伝え、「迷惑をかけることも多くあると思いますが、今後ともどうかよろしく願います。」というお願いをした。(卒業制作より抜粋)

学生主体の活動であるために、自費でフィールドワークをしているという我々の都合は、学生個人の当事者としての位置付けを端的に表しているとも言える。また、こうした意見の衝突を繰り返しながら少しずつ相互理解が進み、結果として継続的に活動は維持できている。

以上の通り、学生は地域においては新参者として活動するが、親元である大学や家族に対する説明においては半ば「逸脱」した行為としての認識を乗り越えながら、活動環境の構築を実現しており、この過程が、学生が当事者として関わっていくうえでの主体性を後押ししているとも考えられる。

6.2 コミュニティへの参画における問題の当事者

本プロジェクトでは、まず島の暮らしを知ることが必要不可欠なプロセスとしており、その過程で、事前に学生が準備し学生がやりたいと思っていたことや、根本的な態度が島社会に馴染まない、または実態を把握できていないことに気付いたり、まだ島の方々と関係性を構築できていない中で実現することが困難であることを実感したりする場合が多い。

既存のコミュニティへの参画が活動を進める上で大前提となることを実感した学生は、島の方々に認められ、参画の度合いを高めていくという課題の当事者となる。

Bは最初に口永良部島を訪れ、島民に仕事の手伝いを申し出た際の状況を、こう振り返る。

島民Aさんに口永良部島のことを教えてもらおうと、島民Aさんの家に伺い、島民Aさんに「仕事をお手伝いさせてください」と話しかけたとき、苦笑いした顔で私を試すように「お前になんの手伝いができるんだ」とすぐに打ち返してきた。

私は返事に詰まってしまったが、今回のフィールドワークの目的は、島での仕事の体験を通して夏の研修内容を考えることなので仕事に関わらないという選択肢はない。慌てて「手伝いできないかもしれないです。それでは学ばせてください。」とさらに返事をしたことを覚えている。

(中略)

それぞれの仕事は島民の皆さんにとって営みだ。その中で大学生の「お手伝いさせてください」という関わりは、面倒を見なければいけない負担であって、また命の危険もある作業ならなおさら、神経を使う。そこに私は「手伝いできることがきっとあるだろう」という役に立つこと、負担になることはさせないだろうという甘い考えがあったと感じ始めた。

島民 A さんの方が大学の関わり的重要性を知っていたのだと思う。だからこそ、島内のあらゆる仕事を丁寧に教えてくれた。

そのために私が心構えとして持つ必要があったのは、島の暮らしも仕事も何も知らないということ、それをゼロから教えるための苦勞と負担が教える人にかかってしまうということだ。「何も知らない」「何もできない」自分が、この島で「何かができる」とどうして思えたのだろうか。恥ずかしい気持ちになった。(本稿執筆のため依頼した手記より抜粋)

そして、多面的な関わり合いの中で、時間をかけて自己紹介をし、交流し、コミュニティの一員としての認識を島民と共有しはじめる。

何もできない自分を知る一方で、フィールドワーク中、休み時間や夜の飲み会などのタイミングで、「お前らは何をしに来たんだ」「君は何ができるのか」、私たち学生が「何者なのか」の問いを多く受ける。

そこで「高校生研修を使って島の活性化を。」という大学の言葉を使うと「お前は何をしゃべってるのか、意味がわからん！」とか言われて伝わらない。だが、自分ができることを答えていくと「お前はサッカーができるのか!」「歌ができるのか!」「勉強教えるのがうまいらしいな!」「お前すぐく飲めるな!」「あはは、面白いな!」少しずつ、あなたはこんな人というのが、島の中で存在を求められていく。(本稿執筆のため依頼した手記より抜粋)

中長期滞在者ではないが、2018 年からプロジェクトに関わり、剣道部での経験を活かして、口永良部島の子どもたちに剣道を教える活動を続けたβも、

最初は自分らしさが出せないことに悩まされていた。

2018年2月、初めて口永良部島を訪れてからはや2年半が経つ。島に入ってまず会話をしたのが、家の解体作業をしている島民Aさんだった。そこで言われた言葉が私が大きく変わるきっかけとなった。船酔いで少し体調が優れず、緊張していたこともあるがその言葉がずっと引っかかっていた。

「なんか怒ってるみたいだぞ。もっと自分を出せ。」

その時の私は、内心、「いやあこれが自分なんだけどな～」と少し聞き流すような気持ちになってしまった。今振り返ると、初対面の人に言われたことに少し納得がいていなかったのだろうと思う。しかしながら、今思うと当時の私は仮面を被った、自分らしさに気づけていない磨きがいのある大学生だった。(2020年度春学期研究会課題レポートより抜粋)

やはりここでも、既存の島の営みに関わり、多面的に知り合うことで状況は少しずつ変容している。

「お前のラーメンはまあまあうまいな、午前中よくやってくれたから、午後は側溝担当や。」

「よし、明日は〇〇の生コンうちやるぞ。朝から〇〇にこいや。」

(中略)

生コン打ちを手伝った翌日、私が流し込んだ生コンの道路の上を颯爽と原付バイクで通過する島民Bさんの様子を見た。その瞬間、自然と喜びの笑顔が出て、自分自身が満面の笑顔になっていることに気づいた。全身筋肉痛の痛みさえ忘れてしまうほどのやりがいを感じる瞬間だった。この時をきっかけに、自然と笑顔になれている自分に驚き、何かの導きの光が見えたような感覚だった。(2020年度春学期研究会課題レポートより抜粋)

プロジェクトメンバーではなかったが、夏の特別研究プロジェクトで3日間だけ島を訪れたことをきっかけに、その後1人で、2ヶ月間現地に滞在したJも、1人で飛び込むことの不安や無力感を初めは強く感じていたことが、彼女の卒業制作からは明らかだ。

9月にお話をさせていただいた、島民Bさんにご挨拶をするも、「だれ?!」の一言。また区長である島民Aさんに、「お世話になります!」とご挨拶をするも、「世話なんかしないよ〜」との一言。

想像以上に冷たい島の人たちにくじけそうになりながらも、島に着いてからは涙は流さない!と心に決めた。(卒業制作より抜粋)

しかし、まずは話をしてみることから全ては始まる。

島民Cさんがいらっしゃる切符売り場へ行き、「何かお手伝いできることはありますか?」と伺うと、早速今日の夜から民宿のお手伝いをさせていただけることに!

民宿のお仕事はそこまで難しくなく、お皿を洗ったり部屋を掃除したりする簡単なものだった。しかし、島でしっかり拠点を持ちながら役割があることは非常に嬉しかった。

(中略)

12月の中頃、いつも通り温泉に入り、帰り際に管理人の島民Dさんとお話をした時のこと。わたしが、このお仕事は島のいろんな人とお話しできるから楽しそうですね〜!と、なんの含みもなく言ったところ…

「うん、楽しいよ〜。でも生コンの仕事があるから忙しくて…。もしよければアルバイトしない?」とお声かけいただいたのだ。わたしは喜んでそのお仕事を引き受けた。帰るまでもう残り3週間くらいになっていたが、ここに来て自分で役割をつくることができ嬉しかった。(卒業制作より抜粋)

コミュニティへの参画について、課題を抱えながらも少しずつ島の活動に

加わりながら、関係性を変容させていく様子は、学生として外部から島に関わる当事者ないし島社会への新参者としての当事者としての姿勢そのものである。外部観察者などの距離感では無い関わりであることがうかがえる。

6.3 肩書きを再構築する大学生

学生は個としての当事者性を現場にて発露させていると同時に、大学生（とりわけこの場合 SFCに通う学生）としての当事者性についても、現場と向き合う過程で変容させながら関わっている。上記で紹介した学生の実際の様子のように、まずは肩書きを取り払い、一個人としての人間性を島民に晒し、関係性を構築しはじめる。後に当初の活動予定や目的と照合しながら「学生だからこそできること」を実現する方向に向かう。このプロセスからは、肩書きの通用しない場所で、肩書きを解体した上で、現場とのすり合わせの中で、自らの力で大学生としての肩書きを再構築し、大学の資源を結び付けながら活動しているように捉えられる。

体育会剣道部に所属していた β は、金岳小中学校の体育の授業にて剣道を教えることになった。

2018年12月、私にとって口永良部島に対する想いや考え、関わり全てにおいて大きな変化の期間となった。念願だった金岳小中学校の体育授業への参画。やっと授業に関われると楽しみではしかなかった。E先生(当時の体育担当の先生)と一緒に授業の内容から、子どもたちに身につけてほしい力など、一緒に考え授業を作ることができた。本格的に教育現場に飛び込むのは初めてだったので、非常に学びの多い機会になった。小学校の先生を志していた時期もあった私にとって、楽しすぎる時間ばかりで、終始感動していた。(2019年秋学期研究会課題レポートより抜粋)

こうしたコミュニケーションや活動の積み重ねから、実践内容に記載した「口永良部島大学」や「SFC キャンパスツアー」の実現など、地域と大学の資源を最大限に活かし合う取り組みがボトムアップで可能となってくると考

えられる。

また、学生は関わった現場と、それに影響を受けて積み上げた自分なりの学生としての肩書きを土台にして、進路を選択する場合がある。この点が、単に若者、ではなく、大学生として関わることの大きな意味につながると考えている。

A は、東京都出身でありながら口永良部島で初めての地方での生活を経験し、本プロジェクトを通じて現場と行政を往復する過程で、地方自治に関心を持つようになる。

そして卒業後の進路として、僕は「国家公務員」を選択しました。元々、大学院に興味がありましたが、もっと開けた環境で、口永良部島での学びと大学での学びを掛け合わせて、思い切り「実践」したい。そう考えたからです。休学している間、大学の疎遠なイメージを実感したと同時に「行政」の疎遠なイメージも実感しました。もっと地域と行政を結びつきを強くしたい、それも口永良部島のような国土の縁から日本を支えている場所と、国家の中核の架け橋になる。僕の役割はそこにあると考え、決断しました。(卒業制作より抜粋)

その後、学部の後半から公務員試験勉強を始めた A は、2 年間に及び繰り返し受験し、地方自治制度を所管する総務省に入省した。

B は、屋久島町役場臨時職員として一年間を過ごした経験から、卒業後は民間の「政策シンクタンク」で働くことに決めた。行政の現場を目の当たりにする中で、町役場で偶然知り合った政策シンクタンクの方の考えと共鳴し、帰京後にインターンシップを開始し、そのまま就職したのだ。

β は、インフラ業界に就職が決まっており、口永良部島との直接的な業務上の関わりはないかもしれないが、長い目で口永良部島に関わる仕事をすることを想像している。

大学生活も残り約半年という時期に差し掛かっている。口永良部島というかけがえのない環境と島民の方々に出会ってはや 2 年半が経とうと

している今、さらに社会人となっても口永良部島と関わり続けたい、関わり続ける具体的なイメージが湧きに湧いている。口永良部島での経験から、明瞭に繋がった社会人でのインフラ業界で働く自分の将来像。現時点で構想できるものには限界はありつつも、あわよくば自分の一番やりがいを感じる仕事を通じて口永良部島との新しい関係を築くことができるのではないかと期待している。(2020年春学期研究会課題レポートより抜粋)

7 継続的な活動

ここまで見てきたように、学生は活動の環境構築、コミュニティへの参画、卒業後の関わりについて、島に対する外部人材としての自分ではなく、島と関わるにあたって自分の問題と向き合う当事者としての自己認識を強く持っている。

この当事者性の獲得には、いくつかの要因が考えられる。

まず、学生個人が未だ「何者でもない」状態でスタートすることだ。先述の通り、入学と同時に研究会が履修可能なカリキュラムでは、まだ学生生活の中での経験値も浅く、専門性も身に付けていない状態でのフィールドワークを可能とする。「何もできない」、「何者でもない」状況で突きつけられる無力感は、役割を模索しようとする強い後押しになると考えられ、その末に獲得された役割は、自身の実力として実感できるものである。この成長のプロセスは、与えられたものでも用意されたものでもない、自分で生み出した課題として、意識づけられるのではないだろうか。

また、活動について、プログラムが用意されず、自分の手で環境を整備しなければならないことも非常に大きい。これまでの本プロジェクトの活動において、学生の活動の準備が他の誰かによってなされたものは一つもない。また資金についても学生自らが獲得しない限り、予算は無い。それはプロジェクトとして何をすべきかよりもまず、学生個人が何をしたいのか、が問われる本プロジェクトの性質があるからこそ、とも言える。手探りで作り上げる環境には、「自分の活動」あるいは「一緒に作った活動」として当事者意識が強く付随しているだろう。

こうして獲得された当事者性は、非常に強い主体性となって学生にプロジェクトや地域への参画を促している。結果として出現する中長期滞在者は地域や行政、小中学校との密接な連携を作り出しており、継続的かつ発展的な活動に結びついているのではないだろうか。学生の生い立ちや生活環境から、卒業後の進路に至るまでの個人的な問題を反芻しながら、紡ぎ出された活動や現地との関係性は、研究会の活動や大学の枠組みを超えた、実社会の営みとして広がっているように感じ取れる。同時に、この関係性を持って、研究会の活動や大学としての取り組みに生かしていくことで、地域または実社会における大学の役割もまた進化するものと考えられる。

本プロジェクトが担う立ち位置を俯瞰してみると、学生たちは、地域、企業、町役場、県庁、大学など、多様なフィールドを縦横無尽に往来し、関係性を構築している。それぞれを舞台に、継続的にプロジェクトメンバーで役割を分担し、あるいは一人が複数の主体を経験し、当事者性の獲得を繰り返すことで、一つも欠かせない各主体を巻き込み、コミュニケーションを促進する架け橋になっているとも言える。ここまで学生の活発な活動が可能になるのは、教員（本プロジェクトにおいては長谷部葉子准教授）の、必要最低限の関係者との調整や十分な学生との対話があることも土台を成している。本プロジェクトに口永良部島の島民として関わっている集落の区長は、SFC の Open Research Forum 2018 の際に長谷部葉子研究会が作成したジャーナルへの寄稿の中で、長谷部准教授について「学生の調律、つまり、学生の能力を引き出して学生それぞれの個性から音色を引き出している。これがまた素晴らしい上手なのだ。先生が直接調律することはなく、それぞれがもつ個性を自ら知ることを促して調律までさせているのだ」と表現しており、その重要性を物語っている。

最後に、2 節にて記載した口永良部島出身の長谷部葉子研究会に所属する学生は、コロナ禍による授業のオンライン化により、故郷の口永良部島の自宅にて、SFC 生として過ごすこととなった。偶然コロナ禍によって起きた事実とはいえ、本プロジェクトが継続して多様な主体を巻き込み、取り組み続けた結果として生まれた、地域や属性の「違い」を乗り越えた「当たり前」の姿なのかもしれない。SFC 生として口永良部島で過ごす彼女の存在は、島

の大人・子どもに非常に新鮮な刺激を与えているに違いない。このことを、一つの総合政策学の結晶としてお伝えしておきたい。

8 おわりに

屋久島町口永良部島と SFC 生が関わり始めてから、10 年が経とうとしている。紆余曲折を経て、当初は想定していなかったような関係性が醸成されている。ここまで継続的に活動が可能となったのは、互いの当事者性のすり合わせに妥協なく時間をかけてきたからのようにも思う。個人としての関係性と組織としての関係性を往復しながら、新しい何かを追求してきた。何よりもまず、学生の自由な活動を見守り、ご一緒してくださった島民の方々の存在があってこそ、本プロジェクトの活動は継続し、またそこに恥じぬように努力を続ける学生の存在があったことも特筆すべきことである。本プロジェクトの築いた地域と大学との関係性は、これからの日本社会に必要な営みのモデルとなると考えている。

また、前述の 4 学期制や 1 年次より研究会が履修可能であることをはじめとする SFC のカリキュラムの柔軟性は、学生の活動範囲やキャンパスライフの自由度に大きく影響し、結果として本プロジェクトにおいても、2 名を除いて休学せずに中長期滞在が可能となっている点において大きな意味を持っている。

SFC は社会にどのような人材が求められているのか、柔軟に思考を続け、「役立つ学問」(大江・梅垣・岡部, 2006, p. 109) を追求してきた。SFC 設立のコンセプトを、改めて学生を主要な主体として位置付けながら、キャンパスで一丸となって、社会課題に向き合い、それを継続的に担う人材をつくっていける精神が SFC には宿っていると考える。

注

- 1) 2020 年 9 月末時点、住民基本台帳人口
- 2) 長谷部葉子研究会は「『教育』から取り組むソーシャルトランスフォーメーションのカタチー地域との協働で構築する関係性のサステナビリティ」をテーマとして掲げ、複数の学生主体のプロジェクトチームが各々の国内外のフィールドを往復しながら活動している。

3) 1907 年 8 月 1 日 -1981 年 1 月 30 日、民俗学者、農村指導者、社会教育家

参考文献

- 中西正司、上野千鶴子 (2003)『当事者主権』岩波新書。
大江守之、梅垣理郎、岡部光明 (2006)『総合政策学—問題発見・解決の方法と実践』慶應義塾大学出版会。
宮本常一 (1968)『民俗学への道』未来社。
宮本常一 (1978)『民俗学の旅』文藝春秋。
松岡広路 (2006)「福祉教育・ボランティア学習の新機軸—当事者性・エンパワメント—」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』11, pp. 12-32。
松岡広路 (2009)「福祉教育・ボランティア学習と ESD の関係性」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』14, pp 8-23。

[受付日 2020. 11. 30]

[採録日 2021. 5. 28]